

キャサリン・マンスフィールドと母

——母と娘の葛藤——

手塚裕子*

Katherine Mansfield and her Mother A Study of Mother - Daughter Relationships

Yuko TEZUKA

Abstract

Motherhood is one of the most universal and reassuring human institutions, and yet at the same time, motherhood and childbearing can be sometimes one of the hardest experiences for women. Although the pain and sufferings of motherhood tended to be underestimated or ignored in the past, now the feminist criticism is reassessing motherhood and childbearing. In this paper I would like to discuss Katherine Mansfield and her mother, focusing their ambivalent relationship which vacillates between love and hate. The purpose of this study is to prove that there is a tie between Mansfield and her mother, even though they seem to hate each other.

Key Words: Katherine Mansfield, feminism, motherhood, childbearing.

序

1918年8月8日、キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923) の母、アニー・ビーチャム (Annie Beachamp, 1864-1918) は、ニュージーランドの首都ウェリントンで54歳で病死する。¹⁾ 2日後、遠く離れたロンドンで母の訃報を受け取ったマンスフィールドは、友人でありライバルでもあった作家のヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf,

*助教授 英文学

1882-1941) に、次のような悲しみの手紙を書き送った。

My mother has died. I cant think of anything else. Ah, Virginia, she was such an exquisite little being, far too fragile and lovely to be dead for ever more.²⁾

ヴァージニア・ウルフもマンスフィールドと同様、母から強い影響を受け、母の突然の死によって大きな打撃を受け、小説の中で繰り返し、母をモデルとした中年女性を描き続けた作家である。近年、ジェンダーの観点から、母親についての研究が多くなってきたが、特に女性作家の場合、母と娘の関係は非常に興味深い研究テーマである。*Mothers in the English Novel: Stereotype to Archetype* (1991) の著者、Marjorie McCormick は、次のように語っている。³⁾「英文学の長い伝統における母親像のステレオタイプとは、聖母マリアのような慈愛にあふれ、苦しみを耐え忍ぶ理想的な女性のことである。彼女たちは欠点もないが、個性もなく、かなり退屈な存在である。一方、反ステレオタイプの悪い母親たち (bad mothers) は、逆に皆個性的で、バラエティーに富み、強い存在感を發揮し、“entertaining” である。」

マンスフィールドの母アニーもウルフの母ジュリアも、いわゆる“bad mothers”であるが、アニーはジュリアのような支配的な母ではなく、母性というものを拒否した母である。このような特異な母親をもったことは、マンスフィールドの人格形成の上で見逃すことのできない大きな影響を与えた。

その母の面影は、“Prelude” (1918) や “At the Bay” (1921)⁴⁾ など、自伝的色彩の濃いニュージーランドを舞台にした小説に登場する冷淡な母親、リンダ・バーネルの中に読み取ることができる。本稿では、キャサリン・マンスフィールドの文学を理解する上で、欠くことのできない存在でありながら、今まであまり研究されてこなかったマンスフィールドの母に焦点をあてて研究してみようと思う。

I

まずマンスフィールドの手紙と伝記から、マンスフィールドと母との関係を調べることにする。マンスフィールドと母との間で実際に交わされた書簡はほとんど現存しないため、マンスフィールドが友人に宛てた手紙の中で母について言及した箇所を幾つか引用してみよう。マンスフィールドは、普段あまり母について語らなかったが、母が死んだ時のみ、集中して複数の友人に、母について語った。たとえば、文学サロンの主催者であったオトリーヌ・モレル令夫

人に宛てた8月11日付の手紙。

I heard the infinitely sad news yesterday that my darling little mother is dead. She was the most exquisite, perfect little being — something between a star and a flower — I simply cannot bear the thought that I shall not see her again. (*Letters*, p.266)

次に親友で画家のドロシー・ブレットに宛てた8月14日付の手紙。

Yes, it is an immense blow. She was the most precious, lovely little being, ever so faraway, you know, and writing me these long letters about the garden and the house and her conversations in bed with Father, and of how she loved sudden unexpected cups of tea — “out of the air, brought by faithful ravens in aprons” — and letters beginning ‘darling child it is the most exquisite day’ — She lived every moment of Life more fully and completely than anyone I’ve ever known — and her gaiety wasn’t any less real for being high courage — courage to meet anything with. (*Letters*, pp.266-7)

そして姉シャーロットに宛てた8月17日付の手紙。

I wish I had kept more of Mother’s letters; they live and breathe. These last are so radiant and they give such a picture of her — don’t they? (*Letters*, p.268)

これら3通の手紙とウルフに宛てた手紙に共通しているのは、マンズフィールドが母を美しく繊細な感受性の持ち主として賛美し、その死によって「非常に大きな打撃」を受け、深い悲しみにひたっていることを強調している点である。母の思い出の中で、最も際立っているのは、ドロシー・ブレット宛の手紙に詳述しているように、母の「素晴らしく生き生きとした手紙」である。母が描いたニュージーランドの屋敷や庭園、父との寝室での会話は、特にマンズフィールドを面白がらせたが、これらの描写は、のちにマンズフィールドが描いた作品“*At the Bay*”でのスタンレーとリンダの会話や“*Garden Party*”の中の屋敷や庭園の描写のモデルになったものと推測される。

これらの手紙の記述だけを読むと、マンズフィールドと母は、仲の良い母と娘であったように錯覚してしまいそうなのだが、母の死後、遺言状が公開された時、遺産相続人の名前の中に

マンスフィールドの名前だけがなかった。母が自分自身の手で、娘マンスフィールドの名前を削除してしまったのである。最初、ビーチャム夫人が1903年に遺言状を作成したとき、彼女の財産である年金250ポンドは、子どもたち全員が平等に分け合うことになっていたが、1909年、或る事件を契機に夫人はマンスフィールドの名前を削除し、その後、二度と、遺言状を修正しようとしなかった。遺産の金額は僅かであるが、遺言状から名前を削除されたことは、いわば、娘としての存在を否定されたのと同然である。母がこれほど冷たい仕打ちをするに至った或る事件とは何だったのか。事件の発端となる1908年にさかのぼってみることにしよう。

1908年7月、19才のマンスフィールドは、作家を志して故郷ニュージーランドを出発してロンドンに向かう。小説を書くために、さまざまな経験をする必要があると考えた、若いマンスフィールドは、危険な恋愛の中に無鉄砲に飛び込む。同じニュージーランド出身のガーネット・トラウエルと恋に落ちるが、破局に終わる。その後、妊娠に気づいたマンスフィールドは慌てて結婚相手を探し、知り合っ間もないジョージ・バウデンという31才の音楽家と、1909年3月2日に、両親に無断で結婚式を挙げるが、その直後、バウデンのもとから逃走する。

マンスフィールドの突然の結婚と逃走の知らせは、直ちにニュージーランドの父母に伝わり、驚いた母親のビーチャム夫人は船でロンドンに向かい、5月27日に到着する。駅までマンスフィールドは母を向かえに来ていた。心身ともに傷ついたマンスフィールドは、はるばる故郷から駆けつけてくれた母に懐かしさを感じていたかもしれないが、ビーチャム夫人はマンスフィールドの姿を見るなり、次のように冷たく言い放った。

Why, child! What are you wearing? You look like an old woman in that. As if you were going to a funeral.⁵⁾

ビーチャム夫人は、マンスフィールドがかぶっていた安っぽい帽子が気に入らなかったのだが、当時のマンスフィールドの孤独と不安を考えれば、帽子を非難する前に、もっと他に言うべきことがあったはずである。この帽子のエピソードはマンスフィールドの心を深く傷つけ、「私の母は鋼のように冷たい人だった」と、後に二度目の夫となるジョン・ミドルトン・マリ(John Middleton Murry, 1889-1957)に語っているが、それはおそらくこの時期の母の言動を指しているものと思われる。⁶⁾

さて、思いやりのない不適切な言葉を放ったビーチャム夫人だったが、その後の行動は迅速だった。夫人はマンスフィールドの妊娠がスキャンダルになることを恐れて、直ちにイギリスを離れてドイツのババリアへ出発する。クレア・トマリンの伝記によれば、当時、不都合な妊

娠をした裕福な中流階級の娘たちは、ドイツでひそかに出産するのが慣例であった。⁷⁾ ビーチャム夫人はマンスフィールドを連れてドイツのホテルにチェック・インするが、その直後夫人は娘を一人残して、さっさと自分だけイギリスに戻り、6月10日には船に乗ってニュージーランドに帰ってしまう。初めての妊娠という、おそらく成人した娘が母親を最も必要とする時に、マンスフィールドの母は娘を外国のホテルに置き去りにしたのである。その後まもなく、マンスフィールドは孤独の中で流産する。一方、ビーチャム夫人は一家の体面に泥を塗った娘の不品行に腹を立て、ニュージーランドに着くと、すぐに弁護士を呼び、8月13日に、遺言状からマンスフィールドの名前を削除する。

その後、マンスフィールドと母は疎遠になっていたが、マンスフィールドが作家として認められるようになった1918年頃には、二人の間で文通が復活していた。そして、5月にマンスフィールドがマリと正式結婚する時には、ビーチャム夫人からお祝いのお金も届き、母娘の間に和解の兆しも芽生えていたが、結局、母は遺言状を書き換えることなく、その年の8月にこの世を去る。こうして、マンスフィールドは母と和解するチャンスを永遠に失い、母の遺言状から削除された娘という不名誉な事実だけが残ってしまった。

マンスフィールドは母の冷たさに抗議するかのようになり、自伝的作品“Prelude”の中で、子どもを愛さない、冷たい母親リンドを登場させているが、次の章では、リンドの冷たさについて研究してみよう。

II

“Prelude”は冒頭からいきなり育児放棄とも言えるような母の冷たい言葉で始まる。この作品はマンスフィールドが4才の春、郊外のカロリへ引越した時の体験をモデルとしている。引越し荷物が予想以上に多かったため、荷馬車にすべてを積むことができなくなってしまい、ロッティーとキザイアという幼い2人の娘たちの乗るスペースさえなくなってしまった。祖母の膝の上には荷物がすでに山のように積まれ、母リンドは疲れていたため、長い道中を「子どものような荷物」“a lump of a child”を膝にのせることはできなかった。2人を乗せるためには、既に積み込んだ荷物を降ろさなくてはならなかったが、母リンドは、「これらの荷物は絶対に必要なものばかりだから、一瞬たりとも目を離せない。」“These are absolute necessities that I will not let out of my sight for one instant”. と主張して、荷物を降ろすことに頑として反対する。

常識的に考えれば、一瞬たりとも目を離せないのは、荷物ではなく、幼い子どもたちのはずなのだが、リンドにとっては、子どもと荷物の価値は逆転している。さらにリンドは、「積み

残したものは、置いていかなければならないわ。そうよ。放っていかなくてはならないのよ。」
“We shall simply have to leave them. That is all. We shall simply have to cast them off.” と言って、ヒステリックに笑う。その笑いは、子どもを捨てたい、子どもから解放されたいというリンダの密かな願望の現われに他ならない。

母に捨てられようとしている危機的状況の下、幼いロッチェーとキザイアは、手を握って立ちすくみ、母親の顔を黙ったまま凝視していた。このとき、隣家のサミュエル・ジョゼフ夫人が飛び出してきて、夕方、荷馬車が残りの荷物を取りに来るまで、子どもたちを家で預かりましようとして申し出てくれた。

Why not leave the children with me for the afternoon, Mrs. Burnell? They could go on the dray with the storeman when he comes in the evening. Those things on the path outside have to go, don't they? (p.223)

ジョゼフ夫人の訛ってはいるが、親切な申し出に対して、リンダはまともに対応することができない。「ええ、荷物は行くことになっています。」と言っただけで、子どもたちについては何も言わない。リンダは逆さまになって置かれているテーブルやイスを見て、「ロッチェーとキザイアも逆立ちして待っていなさい。」と、言いたくてたまらなくなり、この思いつきが面白くて、リンダはジョゼフ夫人の言葉をろくに聴いていなかったのである。

リンダが返事をしないのは、子どものことを心配しているからだと思ったジョゼフ夫人は、次のような言葉を添える。「ご心配なく、バーネル夫人。ロッチェーとキザイアは、私の子どもたちといっしょにお茶を飲んで、その後、必ず、私が2人を荷馬車に乗せてあげますから。」それでも何も言わないリンダにかわって、リンダの母であり、キザイアの祖母であるフェアフィールド夫人がジョゼフ夫人の親切な申し出にお礼を言う。「結局そうするのが一番良いでしょう。有難うございます、サミュエル・ジョゼフ夫人。子どもたち、奥さんにお礼を言いなさい。」ジョゼフ夫人とフェアフィールド夫人の母親らしい会話と比べると、リンダの態度は異様である。

いよいよ荷馬車が出発する時、マンスフィールドのモデルであるキザイアは、姉のロッチェーの手を振りほどき、“I want to kiss my grandma good-bye again.”と叫んで走り寄るが、馬車は行ってしまふ。ロッチェーは、ハンカチで涙をふきながら、“Mother! Grandma!”と叫ぶ。キザイアはぎゅっと唇をかみ締めたまま、涙も見せず、祖母の名は呼んでも、決して母の名を呼ぼうとはしなかった。

サミュエル・ジョゼフ夫人は、親切な母親らしい人だったが、太っていて教養もなく、おそらくバーネル家より貧しく、ジョゼフ家のお茶のテーブルはみすぼらしかった。そのうえ、わんぱくな男の子が何人もいて、彼らはレディーのように気取っているキザイアをからかい始める。キザイアの目から涙が一粒流れ落ちるが、プライドの高い彼女は舌で迅速に涙を捉え、誰にも見られないように涙を食べてしまう。

A tear rolled down her cheek, but she wasn't crying. She couldn't have cried in front of those awful Samuel Josephs. She sat with her head bent, and as the tear dripped slowly down, she caught it with a neat little whisk of her tongue and ate it before any of them had seen. (p.225)

キザイアが涙を食べた場面で、“Prelude”のPart Iは終わる。Part Iでは、母から冷たい仕打ちを受けても唇を噛んで母をじっと見つめ、男の子たちからからかわれても涙を見せまいとして涙を食べるキザイアの仕草から、彼女の悔しさが痛いほどよく表現されている。それにしても、子ども時代の思い出の中で、マンズフィールドが一番最初に書きたかったエピソードとしては、この場面は悲しすぎるのではないだろうか。

“Prelude”は、1915年10月、第一次世界大戦で弟レズリー・ビーチャム（Leslie Beauchamp, 1894-1915）が21才の若さで戦死した直後、弟を追悼するために、ニュージーランドの子ども時代の物語を書こうと決心して描き始めたものである。当時の日記にマンズフィールドは執筆の動機を次のように記している。

Now – now I want to write recollections of my own country. Yes, I want to write about my own country till I simply exhaust my store. Not only because it is ‘a sacred debt’ that I pay to my country because my brother and I were born there, but also because in my thoughts I range with him over all the remembered places. I am never far away from them. I long to renew them in writing. Ah, the people – the people we loved there – of them, too, I want to write. Another ‘debt of love.’ Oh, I want for one moment to make our undiscovered country leap into the eyes of the Old World. It must be mysterious, as thought floating....⁸⁾

「私たちの愛する人々について描きたい。愛の負債(debt of love)だから」という、マンズフィールドの言葉にもかわからず、彼女が最初に書いたのは、冷酷な母親の思い出である。“Prelude”は、最初、“The Aloe”というタイトルで書き出したが、“The Aloe”の冒頭もやはり同じ引越

しの場面から始まる。マンスフィールドにとって、子ども時代の最も強烈な思い出は、あの引越しの場面での母の冷さであったことは明白である。

カリフォルニアへの引越し当時、4才のマンスフィールドは幼くて、母の冷たい言葉に抗議できず、ただ、母の理不尽な振る舞いを凝視することしかできなかった。虐待を受けた子どもが、大人になって初めて重い口を開いて虐待の事実を語り始めるように、マンスフィールドも成人して作家になったとき、まず初めに子ども時代の悲しみをどうしても語らずにはいられなかった。マンスフィールドが“debt of love”と言ったとき、そこには、正と負の愛の負債、つまり、「愛された記憶」と「愛されなかった記憶」の両方が存在する。「愛されなかった記憶」の中心が母であるとするならば、「愛された記憶」の中心は祖母である。“Prelude”の中には、病弱な母のリンダに代わって、幼い子どもたちの世話をし、大家族のために朝食の準備をし、みんなから“Mother”と呼ばれ慕われているのは、祖母である。リンダは子どもを産んだだけで、育児と家事のすべてを自分の母であるフェアフィールド夫人に依存し、リンダは母親というより、まだ娘のようである。この家族の中で、実際の母親は祖母のフェアフィールド夫人である。キザイアが子どもらしい絶対の信頼と愛を寄せる対象も、母親ではなく祖母である。キザイアは、祖母と同じベッドに眠り、祖母を喜ばせるためにプレゼントを作ろうと夢中になる。キザイアと祖母の間には、常に暖かい交流が描かれているが、それは、マンスフィールドと彼女自身の祖母ダイアー夫人の関係を投影している。マンスフィールドというペンネームは、祖母の旧姓であることから、マンスフィールドが祖母をどれほど愛し、感謝していたか疑う余地はない。

一方、祖母とは対照的に、マンスフィールドが母について語る時、母は母性の欠如した冷たい母として登場する。“Prelude”の中でマンスフィールドは、「娘を愛さなかった冷たい母」を糾弾するのだが、母を責める言葉の裏には、母の愛を乞う気持ちが隠されている。マンスフィールドも本当は母から愛されたかった。だからこそ、その思いが母を責める言葉になったのではないだろうか。だが、マンスフィールドは、母を責めるだけでなく、なぜ、母は娘を愛さなかったのか、その理由を探し求めて、母の心を探求する。マンスフィールドの探求については、次の章で“*At the Bay*”を中心に述べることにしよう。

III

“*At the Bay*”は“*Prelude*”の続編ともいえるべき作品で、登場人物もセッティングもほぼ同一である。ただ時間は少しだけ経過していて、“*Prelude*”では生まれていなかった男の子が、“*At the Bay*”には赤ちゃんとして登場する。“*At the Bay*”は、1921年7月にスイスのモンタナの

山荘で書かれたが、執筆前の日記には、“At the Bay’, with more difficult relationships. That’s the whole problem.”⁹⁾と記されている。“At the Bay”を書いた時、母は既に亡く、マンスフィールド自身も結核の病状が悪化し、死期は1年半後に迫っていた。追い詰められた状況の中で、最後にマンスフィールドが書こうとした“more difficult relationships”とは、母との関係ではなかったろうか。母の冷たさを糾弾し、母の愛を乞うだけでなく、マンスフィールドは“At the Bay”の中では、もっと深く母の心の中に踏み込み、子どもを愛せない母、結婚からの逃走を夢見る母を、一人の女性として描きだそうと試みたのではなかろうか。

“At the Bay”では、“Prelude”冒頭の引越しの場面は削除され、夜明けの海辺の美しい描写から始まり、Part VIで母リンダの内面が独白の形で詳しく語られる。リンダにとって、繰り返し問いかけているのに決して答えの出ない、人生最大の謎とは、「産む性」としての母性に対する疑問である。女が子を産むのは、当たり前と言われているが、リンダは、その常識に疑いをもつ。彼女は子産みによって自分が破壊され、弱められ、勇気をくじかれたのだと、次のように告白する。

That was the question she asked and asked, and listened in vain for the answer. It was all very well to say it was the common lot of women to bear children. It wasn’t true. She, for one, could prove that wrong. She was broken, made weak, her courage was gone, through child-bearing. And what made it doubly hard to bear was, she did not love her children. It was useless pretending. Even if she had had the strength she never would have nursed and played with the little girls. No, it was as though a cold breath had chilled her through and through on each of those awful journeys; she had no warmth left to give them. (pp.453-4)

現代よりも医療が進んでいなかった19世紀では、お産で命を落とす産婦も多く、お産は死と隣り合わせの恐怖と苦痛だった。産児制限という概念もなく、女は毎年のように妊娠し、次々に子を産む。特に、跡取りとなる男の子を産むまでは、お産をやめるわけにはいかない。

マンスフィールドの母アニー・ビーチャムは20才で結婚し、10年間で6人の子を産んだが、どのお産も難産で、アニーは産後の疲労が激しく、体調もすぐれなかったので、新生児の世話は、すべて祖母ダイアー夫人の手に委ねられた。アニーは体調を回復する前に、次々に妊娠、出産を繰り返したため、赤ちゃんと触れ合う機会がなく、その結果、母子の絆を確立することができなかったのである。

出産に関わるストレスのため、子どもを可愛いと思えなくなったというリンダ(=アニー)

の主張、正確には、マンスフィールドが解釈した母の主張は、今日でいう、「産後うつ病」の症状とよく似ている。出産のストレスと体力の消耗により、産後の女性に鬱の症状が出やすいことは、最近になってよく知られるようになったが、マンスフィールドの母の時代では、産後女性のメンタルヘルスなど無視されていただろうし、「お腹を痛めた我が子が可愛くないはずがない」という母性神話が幅をきかせていて、とても女性が自分の心の問題を正直に語れる状況ではなかっただろう。¹⁰⁾ そのような時代の中で、母の苦悩の本質を喝破したマンスフィールドの洞察力は非常に鋭いと言えるだろう。

またマンスフィールドは、母は子産みだけでなく、結婚生活にも疑問をもっていたはずだと考える。1920年12月27日の日記に、マンスフィールドは母との架空の対話を書いているが、その中で、母は結婚するより、探検家になりたかったと語らせている。

'Oh dear', she said, 'I do wish I hadn't married. I wish I'd been an explorer'. And then she said dreamily. 'The Rivers of China, for instance'.¹¹⁾

同様の会話は、“At the Bay”の中でも見られる。リンダはタスマニアで過ごした少女時代を回想しながら、父といつか中国の河を探検しようと約束していたのに、スタンレーと結婚してしまったために、彼女の人生はスタンレーを慰めることと、出産の恐怖の中で費やされることになったと、苦々しく思い出している。

結婚するより探検家になりたかったという、母の見果てぬ夢は、娘マンスフィールドが実現することになる。言い換えれば、母の無念の想いが、バネとなってマンスフィールドを結婚の枠に捉われない、自由な世界へと旅立たせたと考えられる。そうになると、一見、反目していた母と娘は、意外と同質のメンタリティを共有していたのではないだろうか。

しかし、実際に結婚の外に飛び出し、孤独と戦いながら現実社会の厳しさを体験しているマンスフィールドは、家庭の中で夫の庇護を受け、子どもたちに囲まれて平和な生活を享受しながら不満だけを募らせる母の「甘さ」を批判する。先に引用した12月27日の日記のつづきには次のように書かれている。

'But what do you know about the rivers of China, darling', I said. For Mother knew no geography whatever; she knew less than a child of ten. 'Nothing', she agreed. 'But I can feel the kind of hat I should wear'.

10才の子どもより地理の知識がないのに、どうやって中国の河を探検できるのかと、マンスフィールドが尋ねると、母は「でも、どんな帽子をかぶればよいか、わかっているわ」と答える。これは1909年に駅で、「なんという帽子をかぶっているの」と母に叱られた、あのエピソードの裏返しである。帽子以外には、実際的な知識を何も持たない母の「甘さ」をマンスフィールドは嗤うが、現代の日本でも、家庭の外に出て自立する才能も勇気もなく努力もしないのに、ただ平凡な結婚生活に不満を募らせる母親は多い。マンスフィールドの母と娘の物語は、驚くほど今日の日本の母娘と共通点している。

では、最後に今まで検証してきた事柄をもとに、もう一度、“Prelude”を見直して、反目する母と娘のメンタリティの意外な近さを実証してみようと思う。

IV

“Prelude”に登場する母リンダと祖母フェアフィールド夫人は対照的な女性として描かれている。マンスフィールドが母リンダには敵意に似た感情を、祖母フェアフィールド夫人には純粹な愛情を感じているため、冷たい母は悪役、優しい家庭の天使のような祖母は善玉のように見えるが、フェアフィールド夫人の肖像は平凡なノスタルジアに流れる傾向があるのに対して、母リンダの肖像は、非常に個性的で刺激的である。“Prelude”のユニークな魅力は、母リンダの特異な個性に負うところが大きい。最初に引用したMcCormickの言葉を借りれば、たしかに家庭の天使は退屈だが、悪い母親は興味深い存在である。

マンスフィールドは、幼い頃、自分を愛さなかった母を憎み、母を批判しつづけていたが、皮肉なことにマンスフィールドは、祖母の優しさより母のエゴイズムを多く受け継いでいたのである。祖母ではなく、母と強く共感していたことを明白に示す、アロエのエピソードを見よう。

“Prelude”の中で唯一、母リンダと娘キザイアがまともに会話するのは、Part IVの終わりで、キザイアが肉厚で棘のある緑灰色の不思議な植物の名前を母に尋ねる場面である。

“Mother, what is it?” asked Kezia....

“That is an aloe, Kezia,” said her mother.

“Does it ever have any flowers?”

“Yes, Kezia,” and Linda smiled down at her, and half shut her eyes.

“Once every hundred years!” (p.240)

この場面では、珍しくリンダがキザイアに微笑み、100年に1度しか花を咲かせない—生殖しない—アロエの神秘をキザイアに伝え、母と娘はアロエの不思議な魅力を共感する。

そして Part XI では、母リンダと祖母フェアフィールド夫人が共に庭のアロエを見ている。リンダはアロエの葉の形から船を連想し、その船に乗って夫や子どもたちのいる家庭から逃走する夢を見る。夫は彼女を溺愛しているが、リンダは夫に愛と憎しみの両方を抱いている。金儲けをつづける夫、そして子を産みつづけるだけの自分。彼女は自分の結婚生活に空しさを感じずにはいられない。リンダは、ふと隣でアロエを見ている自分の母フェアフィールド夫人との共感を求めて、「何を考えているの」と尋ねると、夫人は「何も考えてない」と答え、「果樹園を通り過ぎた時、今年はどんな果実のジャムを作ろうかと考えていた」と告げる。結婚生活の形而上的な意味を考えていたリンダと対照的に、フェアフィールド夫人は手作りのジャムでパントリーをいっぱいにすることしか考えていない。心優しいフェアフィールド夫人ではあるが、リンダの複雑な悩みには対処することができない。それが家庭の天使の限界である。リンダの悩みはアロエの魅力に共感した娘キザイアに受け継がれるのである。

“Prelude”の原題は、“The Aloe”であることから、アロエは非常に重要な象徴的意味をもつと考えられる。アロエの場面は、唯一、キザイアが母と対話し共感した場面であり、愛情をもって描かれていた祖母フェアフィールド夫人の限界が唯一露呈した場面である。

“Prelude”に関して、母との絆を象徴するアロエを最初の題名に選んでいたという事実、そして作品の冒頭には母の非常識な冷たさを非難する引越しの場面を選んでいたという事実、この二つの相反する事実から、私はマンスフィールドの母に対する非常にアンビバレントな想いを感じる。

遺言状の相続人リストから娘の名前を削除した母と、小説の中で母を非難した娘。マンスフィールドと母の間には、激しい憎しみと葛藤があったことは明らかだが、マンスフィールドの作品、手紙、日記、伝記などを読むと、マンスフィールドの中には、母アニーと同じ、強烈なエゴイズム、幸福の中に不幸を見つける鋭敏すぎる感受性、愛を求める人に背を向ける冷酷さ、見果てぬ夢を追う旅への憧れが、はっきりと見られる。

マンスフィールドは、母の心を探求する過程で、母の中に自分と同じメンタリティ、すなわち芸術家のメンタリティを発見したのである。19世紀から20世紀にかけては、女性の生き方や価値観が大きく変わっていった時代である。マンスフィールドと母は、生まれた時代や教育が違っていたため、互いに相容れない異なるタイプの女性のように見えるが、二人は根本的には同じメンタリティをもつ女性だったのではないか。このように、母の中に自分と同じメンタリティを発見し、共感することができた時、マンスフィールドは母と和解するこ

とができたのではないかと思う。

註

- 1) マンズフィールドの伝記的研究については、次の2冊を参考にした。
Alpers, A. *The Life of Katherine Mansfield*, The Viking Press, 1980.
Tomalin, C. *Katherine Mansfield: A Secret Life*, Alfred A. Knopf, 1988.
- 2) Mansfield, K. Ed. By O'Sullivan V. & Scott, M. *The Collected Letters of Katherine Mansfield*, vol. II, Clarendon Press, 1987. (以下 Letters と略する)
- 3) McCormick, M. *Mothers in the English Novel: From Stereotype to Archetype*, Garland Publishing, 1991, p.3. 他に、母と娘について論じた研究書に、Hirsh, M. *The Mother Daughter Plot*, Indiana Univ. Press, 1989. また、筆者は、今までヴァージニア・ウルフの母娘関係について研究を重ねてきた。代表的な論文としては、「ヴァージニア・ウルフと母の亡霊との戦い」『ヴァージニア・ウルフ研究第6号』, 日本ヴァージニア・ウルフ協会, 1989. がある。
- 4) キャサリン・マンズフィールドの作品の出典は、アントニー・アルパーズが編集した、*The Stories of Katherine Mansfield*, Oxford Univ. Press, 1984. を使用した。
- 5) Alpers, p.93. この言葉は、Mantz が取材した John Middleton Murry の思い出からアルパーズが引用したものである。
- 6) Alpers, p.94.
- 7) 母ビーチャム夫人がマンズフィールドの妊娠に気づいていたかどうか、伝記作者の間で意見が分かっている。アルパーズは母は娘の妊娠を知らなかったと述べているが、トマリンは当然知っていたはずだと述べている。本稿ではトマリンの説を採用した。
- 8) Mansfield, K. Ed. By Stead, C.K. *Katherine Mansfield: Letters and Journals*, Penguin Books, 1977, p.65.
- 9) Ibid, p.226.
- 10) 産後うつ病については、テレビ、新聞などで報道されているが、2006年8月には朝日新聞で「患者を生きる一産後うつ」が連載された。自治体による助産師の新生児訪問でも、産後うつ病を支援する方針が示されている。また、母性神話については、大日向雅美、『母性愛神話の罨』, 日本評論社, 2000. を参考にした。
- 11) *Letters and Journals*, p.212.